

[ 出典：三浦俊彦著『虚構世界の存在論』（勁草書房、1995年）第4章第1節より ]

## 1 記述理論(ラッセル)

虚構的存在なるものは指示対象ではない。

虚構名は論理的単位ではない。

虚構的对象の名前(以下「虚構名」と略す)を含め非存在の名前一般についての一つの、おそらくは唯一のパラダイムを設定したのがラッセルの記述理論であることに疑いの余地はない。名前を扱う伝統的諸理論も、今世紀後半以降の新しい諸理論も、ともにその真理と意味の確立のためにはまず直接に格闘しなければならない壁がこの記述理論である。記述理論は諸指示理論の網の目の中で、非常に広い用法と作用を持つが、指示一般についての議論を展開するのが本書の目的ではないので、虚構名に関わる問題点に焦点を絞って以下ラッセル流の分析が含むいくつかの帰結を整理してみたい。

ラッセル(Russell:1905a)によると、日常言語の名詞ならびに名詞句はある対象を指示するとは限らない。特に、単称名辞(singular term)と呼ばれる確定記述および固有名詞は、伝統的に文法上の主語として唯一の対象を指し示すとされてきたが、論理的にはそれは何ら自律的な実体に対応していないかもしれない。よく知られているように、記述理論によると例えば「フランス国王は禿である The king of France is bald.」という文が表現する命題は次のような論理構造を持つとされる。

$\exists x (Fx \supset Kx \supset \forall y (Fy \supset Ky \supset x=y) \supset Bx)$

あるもの  $x$  が(少なくとも一つ)存在し、それはフランスの国王であり、何物もそれがフランス国王であるならばそれは当の  $x$  と同一であり(多くとも一つであり)、そしてそのような  $x$  は禿である。

ラッセルのこの分析では、the king of France という文法的にはまとまった単位である主語が、論理的には  $Kx$  (king)、 $Fx$  (of France)、 $\exists x(\dots \forall y (Fy \supset Ky \supset x=y) \dots)$  (the 一意存在主張「ただ一つ」の意)という具合に分解され、命題の中にバラバラに飛び散ってしまう。つまり指示句は不完全記号なのであり、「それ自体では決していかなる意味も持たず、指示句がその言語表現の一部として現われる命題の各々が意味を持っている」(Russell,1905a;43)。指示句は命題全体を離れて単独では何も指し示さないというわけだ。主語-述語命題とみえた外見は見せかけで、実際は指示句を主語として含む文は存在命題を表わしていたのである。そしてそこにおける主語は存在の含意を含めぬ中立的変項  $x$  によって取って代われ、もとの主語は命題関数の述語と一意存在主張とに分かれて独自の単位であることをやめる。指示句とは、このように存在上もカテゴリ上もそれ自体としてまとまった何物でもない命題中の内容を便宜上まとめて表わした語法装置にすぎない。

こうして、ラッセル自身が以前に抱いていた (Russell,1903) マイノグ的な存在論は根底から論駁される。マイノグ的に言うならあらゆる指示句に対応してその指示対象があることになり、例えばフランスが王政ではない現在に「フランス国王は禿である」と言われた場合、フランス国王は実在しないとはいえ指示されている以上何らかの意味で「ある」のでなければならないことになる。しかし記述理論によれば、フランス国王が存在しない場合は、命題の真の論理形式を示す論理式の  $x(Fx \quad Kx \dots)$  の部分が偽であるのだからそれを連言肢とする命題全体が端的に偽となる。<sup>(1)</sup>(ちなみに一方、フランス国王が二人以上いる場合には、 $(\dots \quad y(Fy \quad Ky \quad x=y) \dots)$  ( $x$  はたかだか一つしかなく...) の部分が端的に偽なので、これも命題全体が偽となる。) よって、「フランス国王」に対応する被指示単位を持たぬ形式をした一命題がただ偽だというだけの話なのであるから、何らフランス国王の存立性は含意されないことになる。ラッセルによれば、非存在物は、いかなる意味でも端的に、無いのである。

この分析は指示句全てに応用されるので、文法的主語が記述の場合だけではなく、いわゆる固有名詞の場合にも当てはまる。ラッセルの記述理論を援用する中でクワインが述べているように、「ペガサスという概念がきわめて曖昧であるか基本的であるかで、記述句への適切な翻訳がすぐには見つからないようであるとしても、人工的かつ一見トリビアルとみえる次のような手段に訴えることができる。すなわち、ペガサスであることという、仮定により分析不能で還元不能な属性に訴え、その表現として「ペガサスである is-Pegasus」とか「ペガサスる pegasizes」といった動詞を採用す

ればよい」(Quine,1948;7-8)。こうして固有名詞も、「ペガサスなもの」のような記述と同じであり、記述理論の分析に服することになる。もっともラッセルにとっては、日常の固有名詞のほとんどが、「ペガサスなもの」のような人工的記述ではなく「翼のある馬」のようなまともな記述と同じと見なされる。いま見たクワインの方策はあくまで、そうした通常の記述が一見みつからないときの便宜的手段である。(ちなみにラッセルに比べ、クワインが「ペガサス」のような虚構名を単称名辞と認めないのは、第一に論理的というより便宜的な理由 - 科学言語のスムーズさ、単純性、エレガンスのためであるフシがある。ex. Quine, 1960;177.)

ラッセルのこの名辞論については、虚構名の理論の観点から見て注意すべきことが三つある。まず第一に、クワインが行なったように固有名の記述への還元が常に可能であるとすると、クワイン自身がちらと触れているように「ペガサス」のような述語を持ち込むと、それに対応する属性すなわちペガサスすることが、プラトンの天上界だか人の心の中だかにある、とコミットすることになると思われるとしても、それはそれでよい。われわれもワイマンもマックスも<sup>(2)</sup>、普遍者があるとかないとかいったことについて争っていたのではなく、ペガサスのあるなしについて争っていたのである」(Quine,1948;8)。そう、実体、個物、特殊者としてのハムレットというものがないとしても、ある種の普遍、属性としてハムレットの存在が認められることになるのではないか。いや、ハムレットは複雑な属性の集合であり分解可能であろうから、ここでいかにもありそうな虚構物語を想定しよう。その物語中に「太郎がいる」という文が現われており、太郎なるものはその文にし

か登場せず、しかもその文は物語中の他の文と一切関係を持っていないとしよう。そうしたいわば孤立的キャラクターは分析不能・還元不能なほど基本的であるから、太郎についてはただ「太郎がいる」 $x(Tx)$ もしくは $x(Tx \quad Ex)$ という命題を述べることができるのみである。<sup>(3)</sup>そこで実体としての太郎は確かに消え失せてはいるが、T(太郎性)というまとまった単位として再登場してきている。カテゴリーこそ違え、「太郎」の指示対象はやはり存在することになる。それは太郎たることという普遍者である。ラッセルの記述理論は、論理的には、非存在への指示句が個物としての指示対象を持つことを否定しているのみで、普遍者としての虚構的对象を否定してはいないことになろう。これは後に見る理論的実体説(第5節)や種類説(第6節)を許容する余地が記述理論にはあるということの意味する。ただしこれも厳密な意味では本当に単純な虚構的对象にしか当てはまらず、ハムレットのような多くの属性からなる普通の虚構的对象は依然として属性と存在主張の束へと分解され完全に消去されることになるであろうけれども。(ラッセルの存在論が命題関数という性質実体を世界の基本的構成要素として要請する内包論理であるとの観察は、Linsky,1983 に詳しい。)

第二の問題点は、「フランス国王は禿ではない」のような文の分析から導かれる。ラッセルによればこの文は二つの命題を表わしうる曖昧な文である。すなわち、

A 「フランス国王は、<禿ではない>という性質を持つ」

$$\forall x (Fx \supset Kx) \wedge \forall y (Fy \supset Ky) \wedge x=y \sim Bx$$

B 「<フランス国王は禿である>ということはない」  
 $\sim \forall x (Fx \supset Kx) \wedge \forall y (Fy \supset Ky) \wedge x=y \supset Bx$

Aは、もとの命題「フランス国王は禿である」と同様、 $\forall x (Fx \supset Kx)$  が偽である以上全体が偽である。一方Bは、もとの命題に対する矛盾命題、すなわち偽なる命題全体を否定するものであるから、真である。「フランス国王」のような指示句がAのような形で現われる現われ方をラッセルは一次的現われと呼び、Bのような現われ方を二次的現われと呼ぶ。非存在指示句が一次的現われで入った命題は常に偽であり、二次的に入った命題は真でありうる。さて、問題はこうである。上の例は、オペレーターが「ではない」という否定演算子( $\sim$ )の場合であった。では、オペレーターが虚構演算子とも呼ぶべきものであったらどうであろう。つまり、上の「でない」を「虚構において」に置き換え、指示句を適切な名前、例えばハムレットと置いて、曖昧な文S「虚構の中でハムレットは男性である」を考えよう。「ハムレット」の一次的現われ、二次的現われに対応してSから次の二つの命題が出てくる。

S A 「ハムレットは、<虚構において男性である>という性質を持つ」  
 $\forall x (Hx \supset \forall y (Hy \supset x=y) \supset \text{inFM}x)$

S B 「虚構において、<ハムレットは男性である>ということが成り立つ」

inF  $x(Hx \rightarrow y(Hy \rightarrow x=y)) \rightarrow Mx$

この二つの命題の区別は、後に考察する de re 命題、de dicto 命題の区別に相当する。<sup>(4)</sup>前者はハムレットについてあることを語り(現実でのハムレットの一意存在を暗に主張し)、後者はハムレットを含む文全体についてあることを語っている(現実でのハムレットの一意存在は主張しない)。ラッセルの記述の論理的分析から出てくることは、S Aは偽であり、S Bは真でありうる、ということが全てである。S Bは真なのか偽なのか。おそらくラッセルはS Bが真であると認めるだろう。ではS Bが真であるとはどのようなことか。S Bは、現実においてではなくFにおいて  $x(Hx \rightarrow y(Hy \rightarrow x=y)) \rightarrow Mx$ が成り立つと言っている。すなわちFのなかのハムレットの一意存在を主張している。それはいったいハムレットがいかなる存在の仕方をしているということなのか。これについては後に見るように諸説が分岐しうるのであり、記述理論がそれだけで独自の立場にコミットすることはない。S Bのような二次的現われにおいて虚構名が現われるとき、記述理論の枠内においても、ハムレットのような実体が何らかの意味でまとまった存在性を有する余地が残されているわけである。もっともラッセル自身は『数理哲学序説』の「記述」の章で虚構的对象について次のように言っている、「動物学がユニコーンを認められないのと同程度に、論理学もユニコーンを認めてはならないと私は主張したい。…ユニコーンが紋章学や文学や想像の中に存在していると言

うのは、実に憐れむべき下らぬ遁辞である。紋章学の中にあるのは、肉と血から成る自力で運動し呼吸する動物ではなく、存在するのは絵であり、言葉による記述である。……シェイクスピアや読者の思考・感情等だけが実在なのであって、それ以外に客観的なハムレットなどというものはない。それが虚構の本質である」(Russell,1919;169)。これはわれわれがすでに扱った言語説、その中でも本章8節に見る代入的量化の理論に近い考えである。「inF」を「虚構世界の中で」などと理解してはいけないというのだ。しかしこれはラッセルの半ば非公式の考えであって、「現実世界の一般的な構造を扱う」彼の記述理論から厳密に帰結する論理とは独立である。現実世界の中ではともかく、inF という文脈もしくは状況もしくは世界の中では、ハムレットは実体として、基本単位として登場しうる、少なくともそう解釈しうるのである。よって記述理論は、後の12、13、14節で論じる de dicto 可能世界説とは直接に矛盾はしないように思われる。

最後に、これも後に見る他の虚構論との関連で、ラッセルの悪名高い(だろうか)「論理的固有名」に係わる論点を一瞥しておきたい。ラッセルの記述的還元は、当然のことながら、虚構名たる固有名だけでなく、実在の人名や地名であるような固有名に対しても適用されなければならない。ラッセルによれば日常言語の文法カテゴリーは贗物である。固有名詞の全てが、論理的にみれば実は固有名ではなく、省略されたもしくは偽装された記述なのである。ほんものの固有名は究極的には「これ」「あれ」「ここ」というような指標的指示子だということになるのだが(ex. Russell,1911) そこまで直示的に徹底しなくとも、指示行為の因果の線に結びついた終点のみを指示対象候補と認める



思考法へラッセル記述理論は道を開いている。これは 11 節で見る直接指示-物理主義の考えである。が、ラッセル流記述主義からの造反に始まり論理的にも対立するように普通思われているクリプキ流直接指示の理論がラッセル説の論理的帰結に根を持っている、ということをごらんとでも確認しておくことは重要であろう。

他にも、以下順次論じていく虚構理論は全て、新旧非存在論の交差点ともいえるラッセル記述理論への参照によって新たに見えてくるところが多いことを、本文では一々指摘の煩は避けるが、読者にはあらかじめ銘記しておいていただきたいと思う。

#### 注：

- (1)  $\exists x (Fx \wedge Kx \wedge \neg y (Fy \wedge Ky \wedge x=y) \wedge Bx)$  (= フランス国王は禿である) は、  
 $\exists x (Fx \wedge Kx) \wedge \exists x (\neg y (Fy \wedge Ky \wedge x=y) \wedge Bx)$  を含意し、 $\exists x (Fx \wedge Kx)$  が端的に偽であるからこの全体も偽、よってもとの「フランス国王は禿である」は偽となる。
- (2) ワイマン、マックスはクワインが論説中に登場させた架空の哲学者。ワイマンは第 4 節で論ずるマイノング主義を奉ずる者であり、マックスは「ペガサスのような非存在物は人間の心の中に観念としてある」という考えを奉ずる者である。本書ではマックス的な素朴心理主義は取り上げない。この説をクワインは、「この心的実体は、人々がペガサスがあることを否定するときに語っているものではない」(Quine, 1948; 2) と片づけている。
- (3) 「太郎」という名を持つ、という性質が付与されているのだからそうした記述に還元できる、と思われるかも

しれない。しかし「太郎」は作中の人物が作中で持つ名ではなく、作者が現実からの操作のために便宜的につけた符牒である場合も想定できる。(戯曲でよく「男1」「男2」といった名が出てくることを想起せよ。)

(4)ただし、ラッセルの、「記述の範囲」はさまざまな段階を許すので、de re - de dicto(あるいは指示的-属性的)と  
いっただいかなる二分法でも尽くすことはできないという指摘をクリプキが行なっている(Kripke,1977;10)。